

地方小出版

情報誌

## アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 136円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター  
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町 20  
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

## 地域づくり—— ///

## 現場の模索から実践者の連携の道を探って

文・(株)産直新聞社/産直コベル編集長 毛賀澤明宏

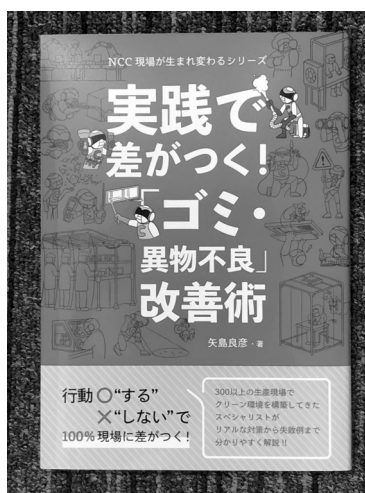
## 地域発、地域で頑張る人々の発信拠点として

ひょんなことから地方・小出版流通センターさんの目に留まり、出版を軸にした小社の取り組み・活動を紹介させていただく機会をいただいた。こんな機会をくださった同社岡安清共同代表に感謝したい。

小社は長野県伊那市に拠点を置く出版並びに地方創生の支援活動等を行う従業員8人ほどの小さな会社だ。今夏、その事業の一環として、「実践で差がつく!『ゴミ・異物不良』改善術」と題するビジネス本を初めて出版した。これに当たり「コベル書房」という単行本出版専用の屋号も決めた。

この本は、地元長野県の高校を卒業後、地元製造業社などで約半世紀にわたり働いてきた矢島良彦さんが、働きながら学び蓄積してきたクリーン化技術のノウハウをまとめ上げた教則本だ。生産現場でごみゼロ・異物混入阻止を目指して働いてきた矢島さんの経験と知識が、半導体製造など超高度な清浄度が求められる現在の製造の現場で働く多くの人たちから「生きた実践の指針、として大切にされ、引き継がれている—そんなことに胸打たれながら書籍化を手伝わせていただいたものだ。

後述するように小社は、農産物直売所や小さな農業を核とした地域づくりの現場をつなぐ雑誌「産直コベル」(隔月刊)や「さんちよく新聞」(不定期刊・フリーペーパー)を編集・発行しているが、それらはまさに「産



「実践で差がつく!『ゴミ・異物不良』改善術」2024年1月、コベル書房より発行したビジネス書。産業領域は異なるが、出版に関する思いは「産直コベル」と同じだ。  
◇矢島良彦著/A5判・定価(本体1800円+税)/ISBN978-4-9913410-0-7

地直送、の刊行物で、基本的に書店店頭での販売をしていない。読者や、それを販売してくれる農産物直売所などへの直送を旨としている。ところが今回の矢島さんの書物は書店店頭出での販売が必要になったことから、様々な流通経路を模索していたところ、地方・小出版流通センターさんと出会った。そして「ユニークな出版活動を少しでも広めたい」と言っていただき、今回の寄稿につながった次第だ。もちろん今回の本のことだけでなく、「産直コベル」等農産物直売関係の出版を含めて「ユニークな」と言ってくださっているのであろう。

小社の出版事業の目指すところは、

「地域発、地域で頑張る人々の発信拠点として」であるが、地方・小出版流通センターさんの思うところと重なる部分が大きいのであろうと、ある種の感慨を感じつつこの原稿を書いている。

## 自社出版事業、編集プロダクション事業、地域創生コンサル事業—3つの事業部門

この寄稿の直接のきっかけになったビジネス本は、新たに「コベル書房」という屋号で発行した。農業・直売事業・地域づくり関係の書物ならば「産直新聞社」という社名で何の問題もないが、まったく畑違いの製造業関連の内容であったためである。

では、そもそも小社=産直新聞社は何をする会社かという、まずは①地域農業や農産物直売事業に関するその時々課題の掘り下げや全国各地の取り組み状況を雑誌「産直コベル」や「さんちよく新聞」にまとめて発信する出版事業、②長野県を代表する信州大学や地元の上場会社などの機関誌・社報などの制作のお手伝いをする編集プロダクション事業、③小社自身が主体となって中山間地の耕作放棄地などを活用した地域づくり事業を進めたり、他のグループや企業などの同種の取り組みをコンサルティングなどを通じて応援サポートする地方創生事業—の3つを事業の柱にしている。

2つ目の編集プロダクション事業から発展して農業・直売事業にとどまらない様々なジャンルでの冊子や単行本の発行業務、映像制作業務なども行う。

3つ目の地方創生事業には、都道府県や市町村、JAなどからの委託を受けて行う農産物直売所の経営セミナーや人材育成事業、また、農林水産省が現在進める地域食品産業連携プロジェクト

クト(通称LFP事業)や、中山間地農業集落の維持継続を目指す農村型地域運営組織(農村RMO)伴走支援事業などもあり、これら二つの事業は長野県事務局を務めている。

### 「自ら考え、自ら発信する」—農産物直売所のネットワークづくりが出発点

以上のようにまとめると、従業員数8人の会社でこれだけの事業領域に手を伸ばられるのかと不思議に思われる方もおられることと思う。我ながら「よくやっている」とやや自嘲気味に思うところもないわけではない。

しかし、それでも何とかこうした事業展開ができてきているのは、そもそも小社の事業の出発点となったのが農産物直売所のネットワークづくりだったことに起因している。

小社の法人としての独立は現在から13年前の2011年だが、その前史となった「産直新聞(現さんちよく新聞)」の発行は、それからさらに5年さかのぼる2006年である。その前年、長野県の農産物直売所の代表350人ほどが一堂に会して「長野県産直サミット」が開催された。その時に、地域農業の発展のためには、地域の農業・直売所サイドからの主体的な情報発信が不可欠だという旨の議論が盛り上がり、直売所のネットワークで直売所の情報を相互に知り合い、また外に向かって発信する「産直新聞」の発行が方向づけされた。

今でも忘れもしないが、その時、サミットの司会に引っ張り出されていた当時地方紙の編集部企画部長だった私は、「そういう発信媒体は必要だが、いったいそれを作るのは誰なのか?」という(今にして思えば言わなければよかった)質問を会場に発した。そして、会場の多くの皆さんにこう言われた。「それは君だよ!」—と。

このような、お笑いトリオ「ダチョウ倶楽部」の定番芸を彷彿とさせるようないきさつを経て、その1年後には、長野県の直売ネットワークづくりを目指す新聞＝「産直新聞」が産声を上げたのである。

購読者は直売事業者や生産出荷者、広告スポンサーも直売事業者と関連事



産直コベル最新号4号分/雑誌「産直コベル」。今回より、地方・小出版流通センターを介して全国の書店で店頭販売が可能になりました。

業者。取材テーマはお互いがそれぞれやっていること、知りたいこと。発信したい内容は、これから農産物直売事業をどういう方向に進めるか、進めたいかというそれぞれの思い。編集会議は、公開で開催し直売事業の関係者ならば誰でも参加することができた。ネットワーク参加者は、必ず購読もしくは自店舗で販売するのが鉄則であったので、基本的に書店店頭での販売はしないなどのルールが決められた。

いまでこそ、農業・直売・道の駅に

関連する出版物は山のように存在するが、2006年当時は、「現代農業」のような農業関連雑誌は存在したが、直売所に特化したものは皆無。確か群馬県のJ A単協が発行するガイドブックのような冊子がひとつだけあったと記憶している。

こういう状況下で、「直売関係者が、自分たちで、自分たちの情報発信媒体を作る」という「夢のような」コンセプトは大きな反響を呼び、ネットワークは瞬間に拡大した。それはそれで素晴らしいことだった。

しかし「夢のような」話であるがゆえに、すぐに直面したのは圧倒的な資金不足。それでもなお、多くの直売関係者が自ら広告主になってくれるだけでなく、様々、編集プロダクションの仕事や編集長である私のサイドワークの働き口を紹介してくれるなどして、「産直新聞」はなんとか発行体制を維持し、2011年には法人化、2013年には全国版の「産直コベル」の発刊(これをもって「産直新聞」はフリーペーパー化した)に至った。その後も、数多くの直売事業に関連する地方創生事業の委託などを受けることで副収益を得ながら今日へと息をつなげてきたのである。

まさに長野県の直売所ネットワークをつくり出し、それに支えられて歩んできた歴史なのである。



産直新聞第1号/2006年8月に発刊した「産直新聞」。現在、「信州版」はフリーペーパーとして季刊発行。ほかに「宮崎版」「青森版」などを不定期で発行。

## 現場の模索を書き取り、実践者の連携へとつなぐ

まもなく20年に及ぼうとしているこうした歴史を通じて、一貫して貫いてきたことは、現に今、全国の直売・農業の仲間たちが実践していること、苦闘していることに向かい合い、それをわがこととして引き受けて書き取り、横に伝搬し、議論を巻き起こす触媒であること。少なくともそれを目指すこと一であった。「さんちよく新聞」「産直コベル」は農産物直売所のネットワークづくりのための媒体なのだから、それは当然のことだと考えてきた。

このことは、ここ何号かの「産直コベル」をご覧いただければ鮮明に理解していただけることと思う。

2024年8月10日付け発行の第67号では、政府、農林水産省が鳴り物入りで推進している地域を挙げた有機栽培の振興＝「オーガニックビレッジ」構想に焦点を当て、農林水産省にその政策的意図を聞き、全国各地の

同構想の推進地域を取材して現状の課題を浮き彫りにした。

前66号（6月発行）では、現在農業集落の維持・生産拡大のために、特に若い世代から注目されている「地域商社づくり」の取り組みを取り上げて、その先進事例をレポートし、全国各地の仲間たちに「良いとこ取り」を呼びかけた。

このように毎号、特集テーマを設定し、小社内外の力を結集して、その取り組みの実態と到達点、課題と問題を浮き彫りにすることを目指している。中山間地を中心に山積する課題を抱えている農業・農業集落には、特定の課題を解決するためにその道を模索している人々の苦闘がある。それを文字に書き取り横に伝搬することで、必ずや、同じ課題を抱える他の地域の人々の役に立つであろうと考えている。連携・協働・ネットワークの力はこうして発揮されると確信している。

ちなみに直売・農業の世界だけでなく、ものづくり産業などにおいても同じことで、今回この寄稿のきっかけになった「実践で差がつく！『ゴミ・異

物不良』改善術」という書籍も、現場で悩む人の力が、別の現場で同じ問題を抱える人を励まし、解決の道を拓くという着想で書籍化をお手伝いした。

今回、地方・小出版流通センターさんのご厚意で書かせていただいたこの小社紹介のページが、新たな模索者・実践者との出会いと連携につながることを期待してやまない。小社に関心を持たれた皆さんはぜひ、下記までご連絡をお願いします！

▽

株式会社産直新聞社／コベル書房  
〒396-0025

長野県伊那市荒井3428-7

産業と若者が息づく拠点施設 alla  
オフィスC

電話：0265-96-0938

FAX：0265-96-0939

HP：

<https://www.sanchoku-coper.com/>

Email：info@j-sanchoku.net

\*

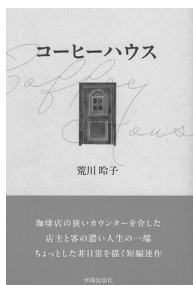
(けがさわ あきひろ・(株)産直新聞社／産直コベル編集長)

## 新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

弊社のホームページでは本誌バックナンバーをアップしております。また「新刊ダイジェスト」のバックナンバーもたくさん掲載してます。これらはすべて無料で閲覧が可能です。よろしければご覧ください。URL：<http://neil.chips.jp/chihosho/>

### 『コーヒーハウス』●荒川 吟子 著



30歳でコーヒーハウス「クスクス」を開店した元事務員の福井雪子。珈琲店をやりたいと思ったきっかけは、同僚たちから嫌がらせを受け、午後3時の休憩時間にのけ者にされたこと。だから昼休みに喫茶店へ行ってくつろいで、午後の嫌がらせに耐える力をつけた。マスターとの適度の距離間も好ましかった。そんな背景があり、さまざまな年齢、職業、階層の人たちと関わったら、人生も人間の幅も広がり面白いだろうなと思い、喫茶店の専門学校に通い、準備をしてきた。

念願の店舗はうなぎの寝床のように奥に細長く、カウンター10席、テーブル席2つの計14席。客と関わりを持ちやすく、かつ人件費節約で自分一人でもやっていけるようにと、カウンター席の多い店造りにした。住宅地にあるから、おのずと客層は近隣の住人となるが、常

連となった男性客から「3年持つかね」と言われても「ナニクソ」根性で乗り切ってきた。客との何気ない会話、こっそりと打ち明けられる秘密。空缶に入れていた釣りが盗まれるなどのトラブルもあったが、店は続き、開店から25年がたち、当時学生だった常連客が上京の際に来店してくれて、彼の仲間たちを懐かしく思い出す。

しかし、時代の流れか小さな商店街は寂れ始めていた。そして開店30年を迎え、店主も60歳になった時、心身の疲労に気づき、ある決心をするが……。

店主と客の織り成す人間模様が詰まった16編の連作短編集。カウンター越しに喜怒哀楽がコーヒーの香りと共に漂ってくる。(Y)

◆1636円・四六判・253頁・光陽出版社・東京・202406刊・ISBN9784876626465

## 『沖繩科学技術大学院大学は東大を超えたのか』●鈴木崇弘 著



沖繩科学技術大学院大学 (OIST) は、沖縄を拠点に世界最高水準の教育研究を行うことで、沖縄の振興と自立的発展、及び世界の科学技術の発展に寄与することを目的に、2012年に開学した。私立大学でありながら、国の法律として同大学学園法が制定され、財政も国が全面的に支援する特異な存在である。

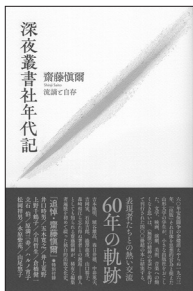
2024年1月現在の博士課程学生数は287名で、うち外国人80% (53カ国)、女性38%である。それに対し、教員91名 (外国人64%)、研究ユニットスタッフ484名 (同67%)、ほかに、研究支援と事務スタッフが517名と、大変に恵まれた環境にある。歴代の理事長・学長はトップレベルの外国人研究者が務めている。公共政策を専門とする著者は、異分野研究者ながら受け入れられた経験から、自由で柔軟な研究環境を提供して

ミッションを実現させようとするOISTのガバナンスを「総合芸術」と評している。そうした成果は、開学からわずか10年足らずの2019年、質の高い論文の発表割合や貢献度を反映させる「Nature Index」の正規化ランキングで、東大の40位、京大の60位を凌いで世界9位にランクされ、また、教員から2022年のノーベル賞受賞者を生んだことに表れている。

本書前段では、日本や日本企業の力、研究開発力の低下が様々な数量分析によって示され、近代社会発展のエンジンであった東大モデルが機能しなくなりつつあることを検証する。OISTはまだ試行錯誤段階にあるが、大きなパラダイム転換の可能性を示している。(飯澤文夫)

◆1360円・新書判・278頁・キーステージ21・東京・202407刊・ISBN9784904933206

## 『深夜叢書社年代記－流論と自存』●齋藤慎爾 著



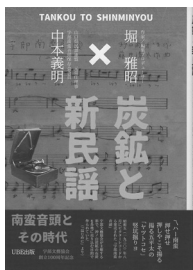
六〇年安保闘争の余燼消えやらぬ一九六三年、山形大学の学生を中心とした同人誌「文学村」のメンバーを母体として出版社、深夜叢書社は出立した。中心にいたのは、高校生の頃から秋元不死男の句誌「氷海」に投句し氷海賞も受賞した若き齋藤慎爾氏である。

六〇年安保体験の思想的深化を目指し、出版行為が自分が思想的営為と捉えられていた。そして「安保闘争とその後の情況は諸個人に思想的死生を問う界域を強いている」そんな内的衝迫に駆り立てられていた。その衝迫は創業時の理念によく現れている。「出版行為は、思想の伝達のみならず、もしも編集作業において自覚的であれば、それ自体すぐれて思想的である。それは、時代の苦い情況のなかで、いうならば、一個の人間存在の相を露わにしなが、世界について

の魂の態度を現実的に追求し、確立する行為を内在させている。私たちはこのようなものとして出版を考える…。名前の「深夜叢書」はナチス・ドイツによる占領下のフランスで抵抗文学の最も多産な母体となった地下出版社〈Éditions de Minuit〉からとった。創業第一冊目となったのは穴戸恭一『現代史の視点』である。その後刊行された書籍は齋藤氏の思想と感性を反映した実に多彩なもので、創業時の理念を裏切らないものだといえよう。桶谷秀昭『芸術の自己革命』、吉本隆明『「反核」異論』、中井英夫『彼方より』、埴谷雄高『埴谷雄高準詩集』…本書では著者それぞれとの邂逅と交流、編集出版の経緯など、貴重なエピソードが満載されている。(N)

◆3400円・220mm×147mm判・364頁・深夜叢書社・東京・202407刊・ISBN9784880325064

## 『炭鉱と新民謡－南蛮音頭とその時代』●中本義明 著



本書は山口県宇部市の地域史を地域に根ざした新民謡や流行歌のレコードでたどるというユニークな方法で展開される。なかでも昭和5 (1930)年に新民謡の「南蛮音頭」がレコード化されるまでの歴史的事実が明らかにされる箇所は本書の白眉だ。

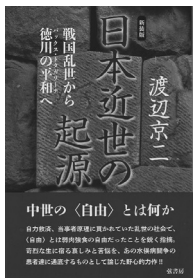
本作りの基礎になったのは、市内で家業の鮮魚店を営みながら、長年にわたり民謡に携わり、地域の民謡の発掘や普及活動が続けてきた中本義明氏が集めた資料である。編著者の堀雅昭氏によればB4ファイル9冊分の膨大な資料で、これは宇部市に住む方々にとっては大変な宝物となろう。評者は千葉県郷土史家だが、レコードによって郷土史を掘り起こす方法があったかと、膝を打った。そして大正時代から始まった新民謡ブームの中心人物の一人が野口雨情な

のだが「南蛮音頭」のレコードに作詞野口雨情と表記されていることに違和感を覚えた中本氏が調査を重ねた結果、市民から歌詞を募集した結果一等に選ばれた金子千壽夫が本来の作詞者で、雨情は実際には宇部に来ず二番以降の歌詞を補作したという事実が明らかにされる。評者は歴史の事実を追求する中本氏の執念に圧倒された。ただし『野口雨情詩と民謡の旅』を読めば、雨情が沖縄を除く日本全国を旅して新民謡の普及に努めたことは間違いなく、レコード裏面の「宇部小唄」は宇部炭鉱を見学した雨情が作詞し、両曲が昭和4 (1929)年にラジオ放送で演奏され成功をおさめたのである。

(石井一彦)

◆1700円・A5判・134頁・UBE出版・山口・202407刊・ISBN9784910845067

『日本近世の起源 新装版』 ●渡辺京二 著



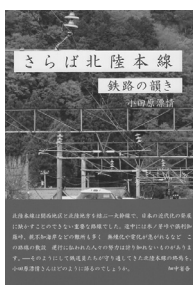
著者の代表作である『逝きし世の面影』で存分に描かれた「後期江戸文明」はいかに形成されたのか。本書で「徳川の平和（ボックス・トクガワナー）」と呼ばれるその特異な社会は、前近代における文明的完成のひとつの極点であるとする著者は、序章においてまず、現代歴史学の潮流の一つとしてある、徳川期と明治維新以降を併せて日本の近代とみなす「広い意味での『近代』」概念に対して異を唱える。徳川期と維新以降には様々な連続性が認められるのは確かながら、両者の間には本質的な亀裂がある、と。そして西洋モデルの近代化によって滅ぼされたその光彩放つ近世共同社会の成立過程を室町、戦国期に遡って説き起こしていくのである。

ところで本書は2004年にまず弓立社から刊行され、2010年に新書版が洋泉社から刊行さ

れたものである。今回本書が新たな装いで復刊されたことは誠に意義深いことだと言える。というのも、本書終章で徳川期における「人々の自立・自存の基盤…ヴァナキュラーな（その地の暮らしに根ざした固有の）社会的「共有地）」という概念について述べられているのだが、異なる文脈ながらそれが、昨今『大洪水の前に』（KADOKAWA）などの著書で知られる若き経済思想家・斎藤幸平氏や、哲学のノーベル賞と言われるパーグルエン哲学・文化賞を受賞した哲学者の柄谷行人氏などが提唱する「コモン」概念と驚くような符号を見せているからである。私たちはその符号の意味するところをこの機に深く考えていいと思う。（岡安 清）

◆1900円・四六判・334頁・弦書房・福岡・202408刊・ISBN9784863292932

『さらば北陸本線 - 鉄道の韻き』 ●小田原漂情 著



北陸本線はかつて滋賀県の米原駅から新潟県の直江津駅まで、福井・石川・富山と日本海側を結んで走る一大幹線でした。しかし北陸新幹線の延伸に伴い、その並行在来線として随時第3セクターに移管されていき、今年の3月には北陸新幹線の敦賀延伸に伴い、わずかに米原～敦賀の区間を残すのみとなってしまいました。本書はそんな北陸本線への惜別の思いを込めて、旅行記や小説が編まれた一冊です。新幹線敦賀開通を控えた昨年11月の乗車記では、北陸本線の歴史に関する記述もありつつ、同時に『時刻表2万キロ』の宮脇俊三ばりに時刻表を熟読して写真を撮ったり取材を済ましていく姿に、著者の鉄道マニアぶりが垣間見られてユーモラスでもあります。あるいは並行在来線は古いインフラとして役目を終えたというのは、「持

続可能」を謳う時代にそぐわないのではないのかという著者の意見には考えさせられるところもあります。他にも夜行列車での北陸行を描いた2010年の急行能登の乗車記も興味深いものです。夜行列車での旅というものが、すでに往年の鉄道旅行の趣が感じられますね。夜の上越国境を越えての雪国新潟、そして先行のブルートレイン北陸との思いがけない遭遇など、旅情にあふれた筆致で描き出されています。かつての北陸への玄関口のひとつであり、こちらも新幹線の開通で廃止された信越本線の碓氷峠を舞台とした小説なども収められ、鉄道が交通の主役だった頃の空気を感じさせます。

(副隊長)

◆1500円・四六判・287頁・言問学舎・東京・202407刊・ISBN9784991363603

地小出版

流通センター

ジャンル別  
新刊案内

2024年7月1日～31日  
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆S-style 2024年8月  
vol. 716 プレスアート編  
280mm×210mm 112頁 600

円 プレスアート [宮城] 978-4-503-23129-1 24/08

◆GREEN REPORT 535  
2024年7月号 廣瀬 仁編 A  
4 191頁 2800円 地域環境ネ  
ット [埼玉] 978-4-909864-67-3

24/07

◆かまくら春秋 No. 651 20  
24年7月号 伊藤 玄二郎編 B  
6 107頁 327円 かまくら春秋  
社 [神奈川] 978-4-7740-0906-3  
24/07

◆かまくら春秋 No. 652 20  
24年8月号 伊藤 玄二郎編 B  
6 107頁 327円 かまくら春秋  
社 [神奈川] 978-4-7740-0907-0  
24/08

◆道 No. 221 木村 郁子編  
A 4 74頁 1143円 どう出  
版 [神奈川] 978-4-910001-45-6  
24/07

◆くらしと教育をつなぐ We N

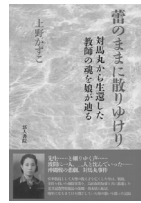
# 売行良好書

期間：2024年7月15日～8月14日

※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

## 【出荷センター扱い】

- (1)『読者としての子ども』1400円・東京子ども図書館
- (2)『オールアラウンドユー』1800円・ナナロク社
- (3)『ロシア文学の怪物たち』1800円・書肆侃侃房
- (4)『沖縄科学技術大学院大学は東大を超えたのか』1360円・キーステージ21
- (5)『蕾のままに散りゆけり』1800円・悠人書院
- (6)『中村哲 思索と行動「ペシャワール会報」現地活動報告集成「下」2002?2019』2700円・忘羊社
- (7)『シベリア鉄道 三度目の正直』2000円・17出版
- (8)『深夜叢書社年代記』3400円・深夜叢書社
- (9)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社
- (10)『パンクの系譜学』2600円・書肆侃侃房
- (11)『韓国ドラマを深く面白くする22人の脚本家たち』2200円・クオン
- (12)『特急やくも写真集』2500円・今井出版



## 【ジュンク堂書店池袋店 地方出版社の本—センター扱い図書】

- (1)『知られざる〈学童保育〉の世界』1900円・寿郎社
- (2)『水上バス浅草行き』1700円・ナナロク社
- (3)『毛利 織田戦争と城郭』3000円・ハーベスト出版
- (4)『新訂 ジュニア版 琉球・沖縄史』1500円・編集工房東洋企画
- (5)『中村哲 思索と行動「ペシャワール会報」現地活動報告集成「下」2002～2019』2700円・忘羊社
- (6)『パンクの系譜学』2600円・書肆侃侃房
- (7)『栃木のきのこ新図鑑』2500円・下野新聞社
- (8)『山形の城と戦国世界』2000円・高志書院
- (9)『ほっこり 凛々しく ナキウサギ』1200円・かりん舎
- (10)『調査されるという迷惑 増補版』1500円・みずのわ出版
- (11)『ジソウのお仕事 データ改訂版』1800円・フェミックス
- (12)『みどりの処方箋』1800円・グリーン情報
- (13)『中村哲 思索と行動「ペシャワール会報」現地活動報告集成「上」1983～2001』2700円・忘羊社
- (14)『24～25 北海道キャンプ場ガイド』1300円・亜瑠西社
- (15)『宇都宮ブレックス シーズンメモリー 2023～24 STRIVE』1600円・下野新聞社



以下ホームページ等でも各種情報提供を行っております。ご利用ください。  
URL : <http://neil.chips.jp/chihosho/> X (旧ツイッター) 公式アカウント : @local\_small

## トピックス — ★★★

▼先月号に掲載いたしました当アクセス誌休刊のお知らせに対して、多くの反響をいただき、驚いております。ささやかな零細企業の紙っぺらの類に過ぎないにもかかわらず、たくさんの購読者の方々に支えられていたのだということを改めて実感した次第です。コメントをいただいた購読者の方々には深く感謝いたします。中には、無書店地域でネット利用も難しい高齢の購読者の方からの直筆のお手紙があり、アクセス誌掲載本のような地方の、そして小さな出版社の良書をこれからどうやって購入すればいいのか、という悲痛とも言える声に接しました。インターネットが社会インフラとなった時代においても紙の媒体であるアクセス誌が書籍購入のための貴重な情報源となり、また、よすがとなっていることもあるのだと知りました。アクセス誌は休刊後、Web情報誌として生まれ変わる予定ですが、もしも、紙媒体として休刊となることで読書難民となるような方がいらっしゃるならば、引き続き、Web掲載の情報をプリントアウトして、その方々に郵送させていただくことに決めております。無書店地域に居住されていてネット利用も難しく、地方出版社や小出版社の刊行情報が必要とされている方は、当方「アクセス」誌発送係までお声かけください。

▼『知の編集工学』『フラジャイル』『日本文化の核心』『千夜千冊エディション』ほか多数の著作があり、編集工学研究所所長、イシス編集学校校長、角川武蔵野ミュージアム館長など多方面で活躍された松岡正剛氏が8月12日80歳で逝去されたとのことです。松岡氏は80年代に「編集工学」を提唱し、編集工学研究所を創立。同研究所が1990年に初版、1996年に増補版を刊行後、長らく絶版になっていた『情報の歴史』の再増補版『情報の歴史21—象形文字から仮想現実まで』を2021年4月に刊行したのを機に、弊社にて同書の取り扱いが始まりました。この場を借りて、謹んで哀悼の意を表します。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

## ジュンク堂書店 淳久堂書店

## 池袋本店

営業時間：午前10時～午後10時

### 池袋でああなたのふるさとに帰ってみませんか？

2階「ふるさとの棚」では、地方小出版流通センター扱いのご当地本を幅広く取り揃え、皆様のお越しをお待ちしております。

〒171-0022  
東京都豊島区南池袋 2-15-5  
TEL 03-5956-6111  
<http://www.junkudo.co.jp>

